



2020年代の大宰府政庁跡と大野城跡（福岡県太宰府市）

終論 大宰府学研究の成果と展望

第1章 研究の成果	小嶋 篤	401
第2章 研究の展望	楠井 隆志・小嶋 篤	409

終論では、第1部～第5部の研究成果をとりまとめ、令和元年（2019）～令和2年（2020）に実施した大宰府学研究の総括を行う。本総括をふまえ、大宰府学研究の今後の展望を記す。



太宰府の地に建てられた九州国立博物館

第1章

研究の成果

小嶋 篤

はじめに

本書は、令和元年度（2019年4月）～令和2年度（2021年3月）にかけての大宰府学研究事業および関連事業のうち、シンポジウム・フォーラム・講座資料、展示図録の論考および新稿を、各執筆者の協力を得て掲載した。再掲載した論考は、掲載時の原稿を活かしているが、加筆・修正が新たに加わっていることを明記しておく。なお、今回の事業実施期間のうち、令和2年（2020）2月以降は新型コロナウイルス感染拡大のため複数の事業が開催中止・延期となり、本書に再録した論考も限定的な配布・公開となってしまったものも多い。大宰府学研究連続講座「筑紫の水・人・祈り」については、事業全体が未実施（延期）となってしまったが、各講師の協力により新稿を本書に掲載頂いた。また、第1部「大宰府研究の歩み」では、大宰府史跡指定100年の節目として、研究史や今後の展望を視野に入れた新稿を掲載頂いた。

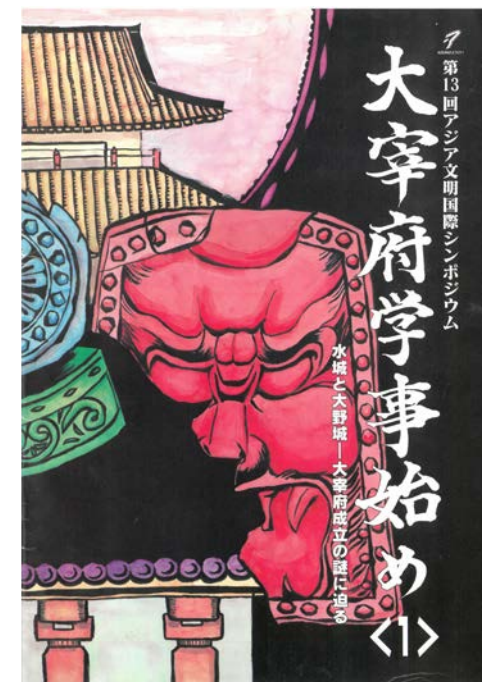
以下では、各論考・解説の概要を整理しながら、令和元年度・2年度における大宰府学研究の成果をまとめる。

1. 大宰府研究の歩み

第1部では、大宰府史跡指定100年の節目に「九州国立博物館と大宰府学研究史」、「大宰府史跡の調査研究史」、「大宰府学研究の成果の活用」をテーマとした論考をまとめた。

第1章「大宰府研究のあゆみと九州国立博物館」では、松川博一が江戸時代より連綿と受け継がれてきた大宰府研究のあゆみを精緻に描写した。その「あゆみ」は、まさに人々が「大宰府を基点に形成されてきた歴史的環境」を学び問い続けてきた営みであり、大宰府学研究史と呼ぶに相応しい。本学史に叙述されるように、研究の萌芽期より通時的に太宰府天満宮が果たした役割は大きく、当宮が「大宰府学の聖地」としてあり続けている。その聖地（旧太宰府天満宮社地）に建設されたのが九州国立博物館である。そして、大宰府研究・大宰府学が潜在的に抱く「アジア」という視点は、九州国立博物館のコンセプト「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」として、博物館活動の根幹に組み込まれている。なお、本学史を通覧すると、川添昭二の「大宰府学とは何か」を端緒として、各時代の研究者毎に大宰府学の研究射程が異なることに気が付く。この多様性もまた、大宰府学研究の学問としての健全性・可能性を示している。

第2章「大宰府史跡の歴史」では、杉原敏之が大宰府史跡の調査研究と保護の歴史をまとめた。本論考では「遺跡をどのように認識し、どのような研究手法で調査に臨んだのか」という視点が通底してお



第13回アジア文明国際シンポジウム
「大宰府学事始め」（1998年）

り、各時代の研究視角を通覧できる内容となっている。とくに、大宰府史跡の発掘調査体制確立にも携わった鏡山猛の研究視角は示唆に富み、官衙や山城を総合的に捉える俯瞰的視野から研究を進めていたことがうかがえる。鏡山の研究は名著『大宰府都城の研究』へと結実し、その後の調査研究を導いていくこととなる。また、杉原が述べるように大宰府の外郭や水城外濠の構造等の研究課題は、大宰府史跡指定100年を経た今日も横たわっている。

第3章「大宰府の印章」では、一瀬智が大宰府の公印「大宰之印」を考証し、その成果に基づく再現文化財の製作・活用を報告した。大宰之印は印影のみが現存するのみで、印章自体は未発見の資料となる。一瀬は印影の計測・字体の検討を基に、現存文書（大宰府公驗・観世音寺資財帳・大宰府牒・大宰府符）に捺された大府之印が、天平宝字～宝亀2年ごろ（8世紀半ば頃）に鑄造されたと考える。そして、8世紀の官鑄印（御笠団印等）を参考に、大宰之印の想定図を描き上げた。本想定図を基に製作された再現文化財・大宰之印は、九州国立博物館が現在進めているユニバーサル・ミュージアムへの取り組みの中で活用されており、大宰府学研究の新たな展開を体現している。



再現文化財「大宰之印」

2. 筑紫の大宰と豪族

第2部では、「大宰府前夜」とも言える古墳時代後期～飛鳥時代（6～7世紀）に焦点を当てた。大宰府の長官「大宰帥」は、『日本書紀』推古天皇17年（609）4月庚子条を初出とする「筑紫大宰」の系譜に連なる。つまり、大宰府の成立過程を明らかにする上で、古墳時代の様相解明は必須課題と言える。

第1章「九州北部の豪族と筑紫大宰」では酒井芳司が文献史料を軸に、磐井の乱前後の豪族の動向と、倭政権（倭王権）の九州支配について整理した。酒井は、那津官家の修造により九州北部各地から穀と人を那津に恒常的に集中させる体制が成立したと考え、本官家を大宰府の西海道総管の歴史的前提として重視する。また、一括りに倭政権の支配と言っても、その内実は人格的な縦割りの命令系統で分断されており、磐井の乱後に限っても、物部氏系部民と大伴氏系部民の拡大、物部守屋討滅を経た四氏族（紀氏・巨勢氏・大伴氏・葛城氏）の筑紫進駐、さらには上宮王家の部民制集積といった複雑な経過・構造をもつ。本整理の白眉はこれらの様相を時系列で整理した上で、大宰府成立の道筋を示した点にあり、とくに曖昧に捉えられがちな筑紫大宰と筑紫総領の職掌とその統合過程の仮説を提示した点が特筆される。小嶋篤による第2章「筑紫・大伴・大伴部」は、筑紫における大伴氏の動向を軸にした解説になっており、大宰帥・大伴旅人が催した梅花の宴につながる歴史と交流の体系的な繋がりに焦点を当てた。本解説は第1章と同様に、筑紫君磐井の乱とその後の軍事動員における部民制の展開を重視する。また、大伴金村の台頭から藤原種継暗殺事件による大伴氏の衰退までを通覧することで、時代区分で分けられがちな「古墳時代豪族としての大伴氏」・「律令官人としての大伴氏」の動向を連続的に解説した。



梅花の宴（山村延燁作）

第3章～第7章は考古資料を軸とした研究で

構成される。第3章「象嵌大刀と刀装具の世界」では、小嶋が古墳時代の稀少な文字史料である象嵌大刀の銘文や象嵌文様から、大王と地方豪族の政治的関係や部民制に基づく重層的な支配構造を解説した。資料数は限られるものの、その様相は第1・2章の内容と整合する。また、本章では国宝・江田船山古墳出土鉄刀の象嵌文様と類似する「伝群馬県藤岡市西平井出土象嵌大刀」の概要を報告し、とくに残存資料が限られる鞘構造（「端切れかがり張り」と「端切れ連結張り」）を組み合わせた「端切れ縫合巻き」の解明に新たな成果があった。本大刀は畿外での屯倉設置が増加する6世紀前半に製作されたと判断できる大型倭装大刀であり、当該期の政治的動態の解明でも今後注目できる。第4章「金銀装大刀と豪族」では大谷晃二が「金銀装大刀の形式差が何を反映しているのか」という重要課題に対し、金銀装大刀の柄頭形式を横断する製作技術の共通性や意匠の理解度等から工人系譜や工房復元を試みた上で、個別事例から追究する。その総合的な結論は道半ばとするが、資料観察から緻密に組み上げられた九州北部の金銀装大刀の最新見解は、今後の研究の基準となるものである。本研究により工房の違う大刀（異なる中央豪族から入手した大刀）が隣接する地域（京都平野・糸島平野）と、大刀の様相に斉一性がある地域（宗像・遠賀川流域）の差異が明確になった意義は大きい。第5章「伝彦徳横穴墓出土の単獣環頭大刀」では資料の事実報告を経て、貴金具・伏金具・環部双走竜文の検討から、先行研究で示されていた製作時期よりも後出することを示した。また、釜尾1号墳の環頭と同型品であることを明らかにし、厳密には出土地不明である本品の相対研究を可能にした。大谷は本品の真贋に慎重な立場を崩さないが、その判断根拠を着実に積み上げたと評価できる。なお、本研究では、柄頭中央の獣像の系譜が中国大陸の神獣意匠にあるとし、渡来系工人の招来が加耶滅亡後も複数回存在した可能性を示しており、今後の研究動向にも一石を投じる内容となっている。第6章「筑紫の豪族の馬装」・第7章「仙掌菴コレクションの馬具」では、西幸子が九州国立博物館所蔵の行橋市仙掌菴福島小太郎氏寄贈資料（以下、仙掌菴コレクション）の馬具を検討した。本コレクションの多くは出土地不明ながら、コレクション全体の構成から見て、京都平野を中心とした周防灘沿岸域の出土品であることが想定できる。西は数少ない出土地同定可能な資料として、『豊前筑前其他出土考古品図譜』に記載されたイモガイ装飾金具を検討し、田川盆地内の墳墓というおおよその出土地把握に至った。また、三鈴杏葉・三環鈴、楕円形三葉文杏葉・楕円形十字文鏡板、心葉形透彫杏葉は古墳時代中期～後期の時代相を反映した馬装であり、瀬戸内海西端の交通路の結節点である豊前地域の出土品として相応しいと評価する。豊前地域では6世紀前半以降の大型金銅装鏡板付轡・杏葉の出土例がないため、仙掌菴コレクションの馬具は一つの参考となる。

3. 大宰府と多賀城

第3部では、西の要地で中国・朝鮮半島との外交や防衛、西海道統治の役割を担った「大宰府」と、東の要地で蝦夷との交渉や陸奥国統治の役割を担った「多賀城」の比較研究を軸に、古代国家の地域支配の実像を探った。

第1章「律令制国家の辺要政策」では、吉村武彦がヤマト王権・律令制国家の辺要政策を検討した。九州地方と東北地方は、それぞれが対外・夷狄政策や対蝦夷政策を抱え、日本律令制国家の「辺要」に位置する。吉村は両地域の施策について文献史料を軸に考古資料を絡めながら時系列上で整理し、辺要の実像に迫った。そして、唐・新羅による軍事的脅威の消滅による防御体制の再構築が、西日本の



往時の大宰府政庁

古代山城の廃城・変容、そして夷狄政策の転換（隼人観の変化）へとつながる道筋を示した。

佐藤信による第2章「大宰府と多賀城」では、両遺跡の調査研究の歩みも振り返りながら、機能と諸施設について整理した。佐藤が述べるように、「中央からのまなざしと地方からのまなざしの両者からの視座を統合した列島全体の古代史像」を目指すとき、辺要を統括する大宰府・多賀城の調査研究成果が果たす役割は大きい。また、「大宰府をめぐる遺跡群を、総体として大宰府史跡群としてとらえる視角」は、九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集の主軸である「大宰府学研究」の根幹の一つである。

第3章「西の拠点 大宰府」、第4章「東の拠点 多賀城」は、日本律令制国家の東西拠点のうち、政庁をはじめとする中枢官衙の構造や機能を整理した報告となっている。第3章の酒井芳司の報告では、計画的な正式発掘調査報告の刊行を通じて全体像が見えてきた大宰府政庁周辺官衙跡の最新見解がまとめられている。大宰府の内部には、政所をはじめ19の役所（所・司）があったとされるが、その比定については各研究者で異なる現状がある。酒井が指摘するように「各研究者の方法論の妥当性を検討する」ことが重要であり、大宰府官衙における本検討過程は官衙遺跡研究における試金石の一つとなるだろう。第4章の吉野武による報告では、主に出土文字資料から陸奥国の軍事、行政、文化が整理されている。多賀城跡城前地区官衙の発掘調査での「（鎮守）府符」等の文字資料の確認から、当地における奈良時代の鎮守府の実在、鎮守府の実務が城前地区官衙でなされていることが判明した意義は大きく、各官衙の機能比定も前進させた。また、漆紙文書をはじめとする豊富な文字資料で確認できる『孝経』や『楽毅論』等は、地方における律令官人の文化水準を示す資料群であり、多賀城が「東の一都会」であったことがうかがえる。

第5章「古代都市 大宰府」、第6章「古代都市 多賀城」は、都市としての全体像と形成過程を把握し、その景観に関する最新研究成果を整理した報告である。井上信正による第5章の報告では、百済の役から筑紫の役にかけての大宰府の都市整備過程を整理した。本整理に基づくと、大宰府における都市の成立は7世紀末（おそらく680年代以降）である。そして、天智朝の水城等の土塁は遮断城や長城の類で羅城ではないとし、百済での有事の山城利用をふまえると、栗隈王らは大野城を拠点としていたという仮説を提示する。また、『観世音寺文書』や大宰府条坊の発掘調査の相互検証を基に、条坊設計線とその範囲の特定作業を進めた。井上が提示する「8世紀の大宰府は、天智朝築造の水城・大野城・基肆城、その他を外郭とし、天武・持統朝造営の条坊を利用して、北闕型の中国系都城となった」という整備過程は、現在の最有力見解である。高橋透による第6章の報告では、まず多賀城跡南面の山王・市川橋遺跡における方格状地割の変遷を整理した後、館前遺跡や多賀城廃寺を含めた都市景観の概要を示した。多賀城南面では7世紀後半～8世紀前半に区画施設が確認できるものの、方格状地割の形成は8世紀末頃と見られ、以後の遺構検出数は多い。また、平安時代以降では、東西大路沿いの国司館、他の居住域、各種工房の配置が判別できる。

林部均による第8章「多賀城・大宰府の成立と古代国家」では、両官衙の成立期である7世紀後半の様相に着目し、全国的な官衙の動向をふまえた上で古代国家の地域支配について検討した。林部は大宰府中心史観ではなく、「西海道諸国から大宰府、そして王宮・王都をみる視点が必要」と説く。その端的な事例として、藤原宮をモデルに造営されたと考える福原長者原遺跡（豊国・福岡県行橋市所在）を挙げ、「大宰府政庁Ⅱ期の成立に先行する巨大な官衙遺跡として、西海道支配にかかわって、何か特別な任務を担った」と想定した。つまり、西海道の地域支配は、すべてが大宰府中心ではなく、複雑な経緯を経て成立した可能性を新たに提示したのである。

4. 「西の都」大宰府・沖ノ島と「東の都」斎宮・伊勢神宮

第4部では、日本列島の東西で都市機構をもち、かつ律令制祭祀の拠点的役割を果たした斎宮・伊勢神宮と大宰府・沖ノ島の比較から、各地のカミマツリがどのような経過を経て、律令制祭祀へと変遷し

ていくかを検討した。

第1章「西の都・大宰府」と第2章「東の都・斎宮と斎王」では、それぞれ議論の前提となる先行研究の成果を統合した内容となっている。第1章の吉田東明による大宰府の整理は、大宰府政庁周辺官衙跡や大宰府外郭線と目される前畑遺跡の土塁等の最新成果を盛り込んでいる。また、梅花の宴が催された大伴旅人邸は、にわかに脚光を浴びた研究テーマであるが、その有力候補地として①坂本八幡宮説、②月山丘陵周辺説、③榎社周辺説の三説を紹介した。第2章の山中由紀子による斎宮と斎王の整理では、文献史料から把握できる実態を示した後、斎宮跡の最新発掘調査成果を紹介した。天皇の皇祖神を祀る一連の祭式は、『延喜式斎宮式』から時系列で祭式の細部が分かる他、「忌詞」の実態も把握できるなど、古代祭祀の実像を示す重要資料と評価できる。

西宮秀紀による第3章「王権祭祀から律令制祭祀へ」は、第4部の基幹となる論考であり、文献史学の立場から伊勢神宮・宗像神社・斎宮・大宰府を軸に古代日本の祭祀の変遷を俯瞰した。宗像神社や大宰府に係わる研究成果を概略すると、律令制下の宗像神社は西海道の明神・大社として西海道筑前国に属し、大宰帥が筑前国司を兼任する期間においては直接的な関係を有した。具体的には、班幣に際して宗像神主・祝部が大宰府に赴き、同地で班たれるという方式を想定する。また、通常の班幣以外にも、朝廷からの臨時奉幣使の派遣も肯定する。これらを総括した「沖ノ島を含む宗像神社への奉幣・奉獻物・神宝（祭祀遺物）には、国家（王権）－氏族－漁民という三重構造のモノが含まれていた」という提言は沖ノ島祭祀遺跡を理解する上で重要である。また、文字史料が少ない大宰府主神と卜部の職掌・関係の整理は、今後の研究基盤と成り得る成果である。

第4章「考古資料からみた斎宮・伊勢神宮の成立」、第5章「考古資料からみた宗像君・沖ノ島祭祀の実像」は、双方とも律令制祭祀成立以前からの祭祀の実態を検討した論考である。宮原佑治による第4章は、斎宮・伊勢神宮成立の直接資料（飛鳥時代の斎宮等）の現況を整理した上で、広義の伊勢地域とヤマト王権の関係を示す資料の時系列的把握から、成立期の上限・様相を探るという構成である。5世紀にヤマト王権の東国掌握が進むものの、6世紀以降の多気郡・度会郡での地域首長の出現と産業の発展がより斎宮・伊勢神宮の成立に関わると想定する。第5章では小嶋篤が、①宗像君による政教一致の支配構造の様相、②宗像君と沖ノ島祭祀の関係、③大宰府管内の社の空間構成を考古資料から論証し

た。新知見としては、沖ノ島出土土器の観察所見から6世紀以降の土器類の調達では、「製品から祭具を選択する」方式に加え、「祭具用の製品を製作する」方式が加わることを示した。つまり、祭祀の準備段階を含めた沖ノ島祭祀は島内のみで完結せず、滑石製品と同様に宗像地域全体を包括的に検討する必要がある。



史跡公園「さいくう 平安の社」



宗像・沖ノ島

5. 筑紫の人・水・祈り

第5部では河川・水路・古墳・都市・石造物・陶磁器・土師器等の考古資料を軸に、水にまつわる歴史の体系的研究を試みた。本研究のねらいは、「大宰府を基点に形成されてきた歴史的環境」の構成要素としての水・河川に対する研究視点・方法の錬磨にある。大宰府がある二日市地峡帯は分水嶺を擁し、玄界灘には御笠川、有明海には宝満川が注ぐ。このような地理的境界に築かれた古代都市が大宰府であり、その歴史の傍らには常に河川が存在があった。大宰府成立の契機となり、後の外郭施設となった水城は、その名が示すとおり二日市地峡帯の水路網と結合した施設であったと考えられる。また、地峡帯に降り注いだ雨水は短時間で谷底へと向かい、排水能力に限界がある低地では今日にいたるまで水害に悩まされている歴史がある。一方で農業用水・生活用水の安定供給力が乏しいため、山麓域での溜池や水路網の整備が進められてきた歴史もある。「古代都市・大宰府の水路網はいかに整備され、どのように改変され、今日の景観を形成したのか」は大宰府学の研究対象として相応しく、未来の景観考える素材としても重要と言えよう。

第1章「川の歴史学」では朝岡俊也・小嶋篤・中島圭が、河川の今日的景観を構成する歴史資料を「認識・調査・記録」するために、文化人類学的視点から、有形・無形を包括した人類の河川利用形態を俯瞰し、各類型でどのような物質文化（痕跡）が形成されるのかを検討した。そして、本類型と痕跡の認識を基に、福岡県朝倉市小石原川の人為痕跡の調査・記録を進め、有形文化財を中心とした歴史資料の時空間的全体像の把握を試みた。本調査の過程で見出された西洋技術導入以前の谷止工（ホウキ谷水道）等は、中小河川および周辺山麓での調査・記録が、地域史を構成する新たな素材の発見につながることを示す。



女男石（福岡県朝倉市）

第2章「水利の技術と思想」、第3章「川と信仰」では、河川にかかわる技術と信仰を検討した。朝岡俊也による第2章では、博多湾沿岸の水利の技術と思想に係わる考古資料を悉皆的に集成・検討した上で、労働力編成や地域空間設計も視野に考察を進めた。本論考では、水利技術の画期は弥生時代早期と古墳時代中期、集団組織の画期は弥生時代終末期と古墳時代後期にあると結論づける。検討過程で抽出された土製模造鏡の利用形態（出土状況）の地域差は、古墳時代後期の地域像を把握する上で新たな研究素材として注目できる。第3章では、中島圭が筑後川中流域を対象に「水神」の建立理由、信仰対象物（水神を祀るかたち）、民俗事例を検討した。本検討では、「水神」とする信仰対象物には筑後川中流域内部においても地域差があり、河原の堆積物（石材・土砂）に対応するように、祠や石碑の比率が変化することが明らかにされた。本研究成果は、各時代の歴史資料を分析・解釈する上での方法論の錬磨にも寄与するものである。

第4章「神仏と向き合う人の歴史」、第5章「風水思想と古墳・都市」では、律令国家形成期の信仰体系・思想に焦点を当て、俯瞰的な視点から河川を組み込んだ信仰・思想を解説した。小嶋篤による第4章では古墳時代の神観を認識した上で、神祇祭祀として体系化されていく神まつりの目的・所作・司祭者に関する研究の到達点を解説した。学術的には、考古資料の観察所見・分析から大宰府管内における社の具体像を復元した点が注目できる。下原幸裕による第5章では、中国王朝下で成立した風水思想の概要をまとめた上で、古代日本への風水思想の波及過程を文献史料から整理した。また、藤原京・平

城京・大宰府における都市の立地、九州北部の終末期古墳の立地を検討した。大宰府の検討では、従来の風水地形の理解に加えて、高尾一帯の丘陵や牛頸窯跡群がある一帯の丘陵も風水地形として把握されていた可能性を指摘する。そして、それらを統合した地形環境で俯瞰すると、大宰府政庁は幾重にも重なる風水地形の中心に位置すると評価する。下原が述べるように風水思想と立地検討にはいくつもの課題・前提はあるが、方位を軸に計画設定された条坊都市には中国王朝で培われた思想が反映されていることは確実であり、その内実の解明は研究課題の一つと言えよう。



三連水車（福岡県朝倉市）

第6章「航路でつながる信仰」、第7章「海を渡った陶磁器と土師器の交差点」は、中世の外洋航海・河川交通等によりつながった信仰・情報・物資を検討した。山内亮平による第6章では、福岡県下を中心に九州の中国系石造物の造営背景やその影響を探った。本論考では、中国系石造物と日本の中世石塔との構造的差異に着目し、宋人石工がもたらした知（情報・信仰）と仏画や経典等の図像情報等を別個に把握することで、九州石造物成立の道筋を概念的に示した。本道筋をより確かなものにするには、山内が繰り返し注意喚起をうながす、港湾都市周辺の発掘調査での石塔加工に伴う残滓の確認等の物証の積み上げが求められる。第7章では小野裕子が貿易陶磁器と土師器の共伴事例を丹念に探り、大宰府と両筑平野において共伴関係のズレが生じていることを指摘した。本現象の歴史的解釈には、陶磁器・土師器編年という前提や遺構（中世墓）の性格等の課題があるが、大宰府と両筑平野において陶磁器と土師器の使用状況に差があることは認められ、物流解明の検討素材の一つとして注目できる。

第8章「基肄城跡と水門」、第9章「山城で水をつかう」では、古代山城の水源・水門・貯水施設を検討した。第8章では主税英徳が基肄城跡の水門・通水溝について整理した。水門規模の日韓古代山城の比較による、基肄城跡の水門は最大規模に位置づけられると言う。また、主税は排水施設と貯水遺構の類例の検討から、基肄城跡の通水溝の背部に貯水遺構が存在した可能性を提示した。第9章では小澤佳憲が古代山城の水資源に着目し、利水・貯水施設を検討した。本検討ではまず発掘調査で実例が確認できる韓国古代山城の様相を整理し、立地条件の差から貯水池の機能に違いが見出せることを示した。具体的には、「利水・貯水施設の集水能力をある程度犠牲にしても、水が用いられる施設などの近くに設置する場合は、その水の使用目的が、近隣施設の使用目的に特化して、ある程度限定的であった」ことを推測し、一方で「谷部など集水力が大きな場所を選んで設置される利水・貯水施設は、付近にほかの施設が見られない場合などは特に、城内で想定されるさまざまな水の用途に対応する総合的な機能が期待された」という二相を抽出した。本研究視点を応用して、調査実績が少ない西日本古代山城の検討へと論を進め、鬼ノ城跡第5水門における貯水範囲の位置等についての新たな見解を提示した。本論考には水門と利水・貯水施設の位置関係等、今後の古代山城研究に資する研究視点が多く盛り込まれている。

おわりに

以上、各論考・解説をテーマ毎に整理し、大宰府学研究成果を概略的にまとめた。大宰府史跡指定100年の節目にあたり、第1部では大宰府学研究成果の歴史に加え、今後の展望や課題を提示した。また、第2部では大宰府前夜とも言える古墳時代の社会像を探った。第3部では大宰府と多賀城、第4部では

大宰府・沖ノ島と斎宮・伊勢神宮をそれぞれ比較し、大宰府の相対的位置づけを図った。第5部では水・人・祈りをテーマに検討し、新たな研究視角の獲得や研究手法の錬磨を試みた。このように、本書では大宰府史跡の調査研究と直結する論考に加え、将来的な研究を展望できる論考も収録できたことが研究の成果と総括できる。

第2章

研究の展望

楠井 隆志・小嶋 篤

はじめに

本書を総括するにあたり、第1～5部の研究成果を軸に「大宰府学研究と博物館活動」、「大宰府学研究の新たな試み」を整理し、今後の大宰府学研究的展望を記す。

1. 大宰府学研究と博物館活動

第1部「大宰府研究の歩み」では、第1・2章において大宰府史跡の調査研究と史跡保護に重点をおいた研究史がまとめられた。とくに松川博一による大宰府学研究史の整理では、九州国立博物館の設立は大宰府史跡の調査・研究・保存の一つの到達点であるとともに、史跡の活用にも大きな期待とともに責任を負っていることが分かる。

第3章では、一瀬智が大宰府学研究的の新たな展開の一つとして、ユニバーサル・ミュージアムとも連動する再現文化財の製作事業を報告した。ユニバーサル・ミュージアムとは、年齢、国籍、障がいの有無など関係なく、すべての多様な人々が楽しめる博物館を目指す取り組みをいう。本事業の前提となる「大宰之印」の考証は史上初めての試みであり、学術的価値は高く評価されよう。また、研究の成果物である再現文化財「大宰之印」は、誰でも手に持つことができ、実際に押印することもできる。体験者は大宰府の役割や歴史の重みをリアルに感じることだろう。このような取り組みは、調査研究成果の幅広い社会還元にもつながり、大宰府学研究に通底する理念と合致するものである。九州国立博物館が実施する大宰府学研究は、「大宰府を基点に形成された歴史的環境」から「学んだものを活かし、新たな問いを生み出す」という過程に本質があることはもちろんだが、研究者に限らず、「すべての人々に大宰府学研究的の成果をわかりやすく面白く伝える」という新しい段階に入ったといえる。今後の取り組みも、おおいに期待してほしい。



再現文化財「大宰之印」の押印体験



2. 大宰府学研究の新たな試み

第2部「筑紫の大宰と豪族」では、大宰府の前身と目される筑紫大宰や那津官家が成立する古墳時代後期の社会像を真正面から取り組んだ。第1～7章を通覧すれば分かるように、文献史学と考古学で仮説構築が可能な研究射程に依然隔たりがあることは否めない。しかし、実証的な歴史学を構成するための研究視点・研究素材の蓄積は、文献史学と考古学の双方で着実に進んでいることが実感できる。

同様に文献史学と考古学の双方の立場から研究を進めたのが、第3部「大宰府と多賀城」・第4部「〔西の都〕大宰府・沖ノ島と〔東の都〕斎宮・伊勢神宮」である。第3部では、文献史学と考古学の双方の立場から、大宰府と多賀城を基点に古代国家の地域支配の実像を探った。先行研究の総合的整理をしたのみならず、林部均による「藤原宮をモデルした官衙の東西出現」等の新たな研究視点を提示した点が特筆される。また、酒井芳司が述べるように「各研究者の方法論の妥当性を検討する」ことが重要である。大宰府史跡指定100年を経た現在、各研究成果の批判統合過程で研究方法を錬磨し、学問的精度をより高めていくことが大宰府学研究に求められている。第4部では、文字史料が豊富な斎宮・伊勢神宮における律令制祭祀（職制や祭式等）の研究成果から、大宰府・沖ノ島祭祀の具体像がおぼろげながら見えてきた。西宮秀紀が指摘する沖ノ島祭祀への王権・朝廷の直接関与の減少、加えて臨時奉幣使の存在は、沖ノ島祭祀遺跡の様相と親和的である。また、大宰府・沖ノ島との比較から、律令制国家の信仰体系における斎宮・伊勢神宮の重要度がより際立ったと言えよう。一方で、成立期（古墳時代）の様相については斎宮・伊勢神宮よりも、沖ノ島祭祀の方が実態解明は進んでいる。両地域の比較研究は、双方向的に今後の研究に資することができる。

第5部「筑紫の水・人・祈り」では、時空間的にも異なる複数の資料を研究対象とした論考をまとめ、大宰府学研究のさらなる深化を試みた。その成果は多岐にわたるが、新たな研究視角・実践例として、「中小河川における調査研究の具体例の提示」、「技術と思想の双方向的把握」、「古代山城における利水・貯水」等の成果を挙げることができる。

おわりに

新元号「令和」の制定、大宰府史跡指定100年を迎えた令和元年度～2年度の大宰府学研究では、大宰府史跡を主軸に据えた研究が数多く蓄積された。本研究期間は「梅花の宴」の舞台となった大宰府に全国的な関心が高まった時期とも重なり、社会的ニーズに呼応する研究成果とも評価できる。一方で、本書では大宰府成立以前や近現代の資料も研究対象とする論考も収録した¹⁾。歴史のつながりを丁寧に紐解く作業、およびその成果をさまざまなかたちで発信することは、大宰府学研究のさらなる飛躍へとつながる。九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集が、大宰府の「新たな文化的景観の形成」の一助となれば幸いである。

註

1) 九州国立博物館が取り組む大宰府学研究の研究対象については、赤司・小嶋2019で整理している。

参考文献

赤司善彦・小嶋篤2019「研究の目的」『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第1集 九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター



大宰府史跡指定100年を迎えた日本遺産・大宰府跡（大宰府政庁跡）



大宰府政庁復元CG